

各 県 の 情 報

……・ 熊 本 県 ・……

平成 28 年（2016 年）熊本地震による熊本県内の被災古墳、1 年後

————— 杉井 健（熊本大学文学部）

平成 28 年（2016 年）熊本地震の発生から 1 年が過ぎた。熊本城では倒壊した北十八間櫓や東十八間櫓などの部材が回収され、崩れた石垣石材の回収も進み（図 2）、また先月には天守閣に通じる大型重機用のスロープが設置された。阿蘇神社では倒壊した拝殿の撤去が終了し、楼門の解体作業が始まっている。浄水寺古碑群（宇城市）のうち転倒した南大

門碑も元の位置に戻された（図 3）。このように、被災した文化財の復旧作業は少しずつではあるが進展している。

では、被災した古墳はどのようなだろうか。『九前研通信』第 33 号（以下、通信 33 号）において、昨年 9 月、熊本地震による熊本県内の古墳の被災状況について速報した。地震発生から 1 年が経過した今、

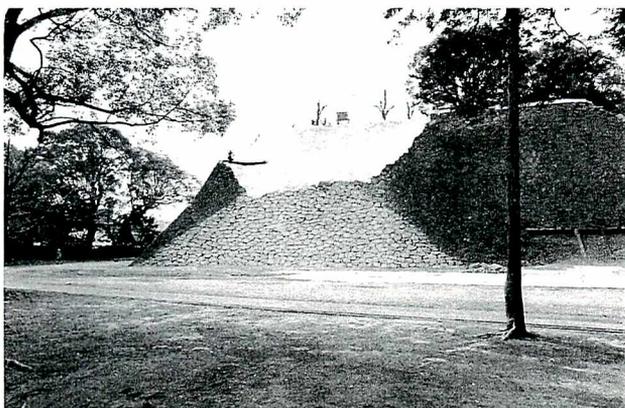


図2 熊本城北十八間櫓部の石垣近況 (2017/3/18)

それらの被災古墳はどのような現状にあるのか。私の知るいくつかの古墳について、現在の状況をお知らせしたい。

井寺古墳 嘉島町にある国指定の装飾古墳(円墳)である。墳丘に亀裂が発生していること、落下した石室石材の影響で入口扉を開くことができないこと、ファイバースコープによる石室内調査が実施され玄室積石のいくつかの落下が確認されていることなどを通信33号でお伝えした。その後、墳丘の亀裂がやや大きくなっていること、入口扉を圧迫していた石室開口部の天井石が完全に落下したことな

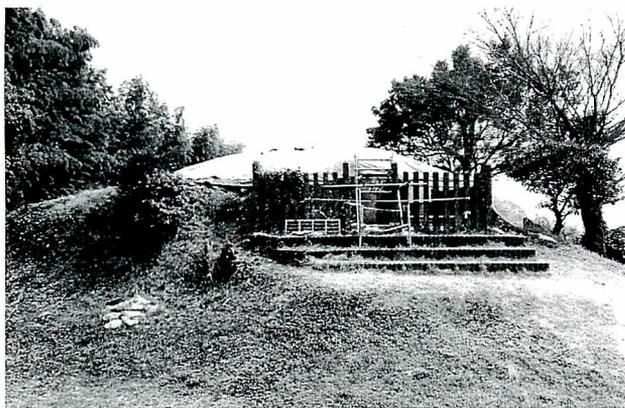


図4 井寺古墳近況 (2017/3/22)

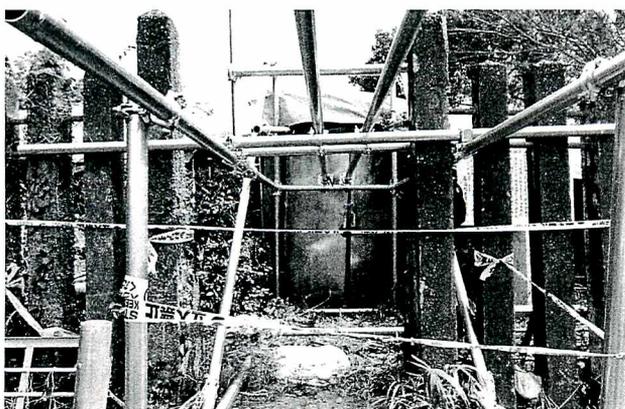


図5 井寺古墳石室入口扉の支え (2017/3/22)



図3 浄水寺碑群南大門碑の再設置作業 (2017/3/28)

どが確認されている。なお、入口扉が転落石材の内側からの圧力でこれ以上破損しないように、鉄管を用いた支えが設置され(図4・5)、また今後の復旧作業に備えて、墳丘とその周辺地形の航空レーザ測量が実施された。航空レーザ測量によって描かれた地形図には、墳頂面に走る亀裂が明瞭に表現されている。今後、まず急がれるのは、石室内のより詳細な状況把握であると思われる。その方法を早急に検討しなければならない。

釜尾古墳 熊本市北区にある国指定の装飾古墳(円墳)である。墳丘盛土が崩落して石室入口をふ



図6 釜尾古墳近況 (2017/4/3)

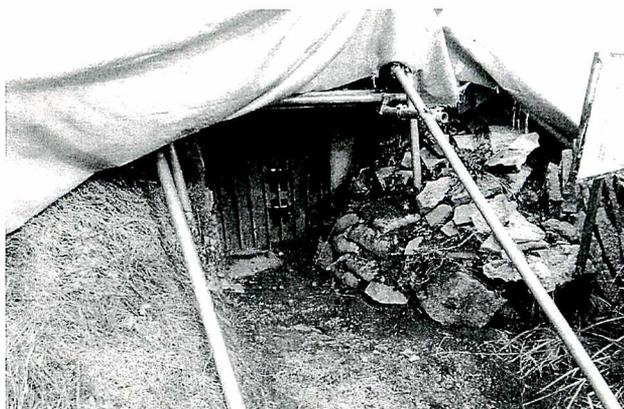


図7 釜尾古墳石室入口部 (2016/12/12)

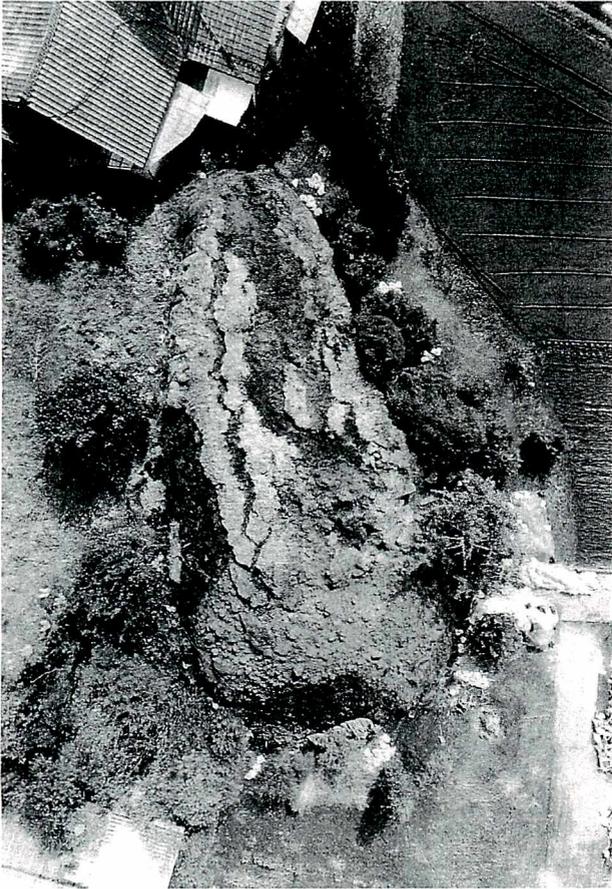


図8 被災直後の今城大塚古墳



図9 今城大塚古墳近況 (2017/3/27)



図10 松橋大塚古墳の修復状況 (2017/4/3)

さいでいること、石室内のファイバースコープ調査が実施されたことなどを通信33号でお伝えした。その後、状況が大きく変化したとの話を聞かない。現在、墳丘にはブルーシートがかけられ(図6)、石室入口部の崩落土は除去されている(図7)。今後、井寺古墳と同じく、石室内のより詳細な状況把握がまずなされる必要がある。

今城大塚古墳 御船町にある町指定の装飾古墳(前方後円墳)である。墳丘にいくつもの亀裂が発生し(図8)、崩落した墳丘盛土によって石室入口がふさがれた。現在、墳丘全面に嚴重にシートがかけられている(図9)。被災当初にシートがかけられて以降、石室や墳丘の状況把握のための調査がなされたとの話を聞かない。井寺古墳に匹敵するほどの被害を受けている恐れがあるので、今後、確認調査の手法等を慎重に検討する必要がある。

松橋大塚古墳 宇城市松橋町にある市指定の前方後円墳である。通信33号で、後円部墳頂の東端部に亀裂が発生し、隣地の住宅への崩落が懸念されたため、立ち会いのもと緊急工事が実施されたことをお伝えした。法面の勾配を緩和するために亀裂箇所が若干削平され、網目シートが貼られた(図10)。立ち会い調査では古墳の盛土は確認されず、除去されたのは後世の埋土のみとのことである。

年の神2号墳 宇城市小川町にある市指定の古墳である。覆屋のなかで保存された石室腰石のうち、奥壁の腰石が前方へ大きく傾斜した。現在も、被災後の傾斜した状態のままである(図11)。

大野窟古墳 氷川町にある国指定の前方後円墳である。玄室積石のいくつかが破損、落下した。現在も、被災当時の状態が保たれている。当古墳の石室にかんしては、2000年に三次元レーザ計測が実施



図11 年の神2号墳近況 (2017/4/3)

されている。そのため、地震による形状変化を客観的な数値で示すことが可能であり、今年度、被災状況を調べるための三次元レーザ計測等が行われる予定となっている。なお、熊本県内の被災石室では、当石室のみが被災前の詳細な三次元データを有している。したがって、具体的な数値データによって被災前と被災後の石室形状を比較できるきわめて貴重な事例となる。石室調査・保存にかんする今後の指針を提示することにもなると思われるから、ていねいな調査・報告がなされる必要がある。

以上のほか、宇城市の桂原古墳や玉名市の永安寺東古墳、熊本市南区の石之室古墳など、被災した石室や石棺は数多い。しかし、上で紹介した古墳の現状からもわかるように、被災古墳のほとんどは、被災した当時の状態のまま現在に至っている。復旧への歩みを踏み出すことができていない古墳も数多

い。しかし、文化庁が主導する「大規模震災における古墳の石室及び横穴墓等の被災状況調査の方法に関する検討委員会」による調査・検討が進められており、「検討結果については、平成29年度埋蔵文化財担当者等講習会及び埋蔵文化財・史跡担当者会議において、公表する」とされている（文化庁2016.12.19）。このことからもうかがえるように、今年度からいよいよ本格的な復旧の検討が始まることになる。息の長い作業になることが予想されるが、今後も会員諸氏のご支援・ご指導を頂戴できれば幸いである。

参考文献

文化庁 2016.12.19「大規模震災における古墳の石室及び横穴墓等の被災状況調査の方法に関する検討委員会について」古墳壁画の保存活用に関する検討会（第21回）資料9-2